
星の怪盗 -怪盗は星の海に沈む-

草薙響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の怪盗 - 怪盗は星の海に沈む -

【ノード】

N60961

【作者名】

草薙響

【あらすじ】

それは、今からそう遠くない未来。電力と機械に頼りきった街が栄える時代。時代錯誤な蒼のビロードなマントを纏い、夜空を駆ける影があった。彼の名は「怪盗プラネス」。この物語は、プラネットスとその仲間たちの、美しくも儚き浪漫をかけた物語……

Prologue · (前書き)

この物語は、純粹な怪盗物語です。

戦闘シーンがまあまあ多いので、時折残酷描写が入るやも知れません。

苦手な方はご注意ください。

Prologue .

それは、今からそう遠くない未来。
小さな島国のジパングが、やつとのことで『ネオジャパン』と呼ばれるよくなつた頃の物語である。

時代は機械、そして電力。

環境保護とは口だけの政治が進み、文化財保全と切り取られた区間以外を急速に発展化。立ち並ぶビルの群れ。出来る影は美しい円筒形を描いていたり、オブジェのように華やかであつたり。

夜道の街灯は月よりも眩しく、夜空よりも煌びやかで、人類の進化を誇らしげに伝えていた。そんな、時代。

そして何の前触れもなしに、“ヤツ”は現れた。

時代錯誤な蒼いビロードのマントを優雅に羽織り、その黒髪を風に靡かせる。夜の街モノクルを、嘲笑うかのように駆けていく。

その左眸の片眼鏡の向こう、レンズ一枚越しの黄金色の左眸を三日月に歪ませて。まるで電力に縋る者どもが心底愚かだとでも言つようだ。“ヤツ”は不敵に笑うのだ。たつた一言、これまた時代錯誤でキザで 重く深い言葉を残して。

「Starry sky is beautiful tonight
ht.」

星空は今宵も美しい。

今日も“ヤツ”は、聞き心地の良い端麗な世界語と、停電した夜

の街を残して去っていく。

骨董品から装飾品、挙句の果てには公園に飾られている優美な置物まで。田についた美術品を、たつた一枚の予告状で指し示し、わざと相手をおびき寄せ、そして攫う。

機械と電力のこの時代。あまりにもそぐわない職業の“ヤツ”は、カナリ傍迷惑な小細工をして、警察の手をノラリクラリとかわすのだ。

“ヤツ”のことを周囲の人間は、キザな捨て台詞と予告状で示した自身の名から、迷惑感と敬意を示して、星の怪盗。やつ、呼んだ。

“ヤツ”の名は、怪盗アラネテス。

惑星の名を持つ怪盗は、今宵も華麗に夜空を舞う。
それがまるで、自らの宿命であるように

1・宴の始まり

秒針が、力チカチと神経質に時を刻む。

この時代に珍しい古風な造りの時計塔は、その後方に位置する美術館と揃いで建てられたものだ。アナログ時計など見たことも無い子どもたちの良い遊び場として、休日の昼は多少の賑わいを見せている。

日は落ちて、現在の時刻は午後十時三分前。当然、朝から夕方にかけて集まっていた子どもたちも家へと帰り、そこは静寂に包まれていた。

しかし今日は、少し様子が違うようである。

街灯によって嫌味のように明るくなっている美術館は、モスグリーンの制服を着用した警官という名の雜踏に囲まれ、さぞ鬱陶しそうに佇んでいた。モスグリーンの群れは皆が皆、緊張と焦りに包まれた表情で、動きを続ける。やがてそれは、その道を行く者しか理解することが出来ない複雑なポジションを踏み、止まった。

「今度こそ逃がすな！俺の面子を潰すんじゃねエぞ！」

質の悪い放送器具を通したのであろう、多少ノイズがかつた野太い声が当たり一面に響き、更に強く大きな緊張の波がよぎる。明らかに近所迷惑になりそうなところだが、生憎この辺り一体は美術館と時計塔を囲む公園のお陰で、住居は無い。

迷惑になるのは、その森の住人たちなわけで。声と同時に、鳥たちはビクリと震え、木の洞うろの中の子栗鼠は長い尾で自分を包み込む。そんなことは知ったこっちゃ無いとばかりに、声の主はモスグリーンではあるが他の警官とは異なるトレンチコートを身に着け、その地位の違いを見せ付けていた。

そんな、何も知らない者からすれば極めて滑稽な、だが関わりあいたくないような光景を一望できる場所に、二つの人影があった。ライトアップされた美術館を囲う公園の隅からその距離、三百メートル。この区間にしてはさほど珍しくも無い四階建てマンションの屋上で、彼等は細く口元を歪めた。

「大変そうだなー。相も変わらず」

公園から吹き抜けてくる風を顔に受けながら、黒髪の青年は微笑む。その長い黒髪は緩く一つに結われ、風に遊ばれサラサラと流れた。それはまるで、初めて動物を見た赤子のように純粋で無垢な笑顔だったが、同時にそれを青年が持つこと自体の狂氣をも示している。

彼が青い手袋をした右手で黒髪を搔き上げる様は、明るい夜の中で異様なほど美しく、絵になつた。

「貴方がその原因の癖に、何を言つているんですか」

黒髪の青年の横には、風に靡く癖の無い栗色の髪を鬱陶しそうに扱いのける少年の姿。彼は、早春の寒空の中冷たくなつていてるでもらつコンクリートの床に座り込み、カタカタとノートパソコンのキーボードを叩いている。少年の手の動きに合わせ、青色のウインドウが幾つも宙に映り、文字を表示しては消え、忙しない運動を繰り返す。パソコンのディスプレイを空中に移すことが出来るようになつたのは、もう随分と前のことだ。

「……出来ましたよ」

「ふーん。きつかり三分で元に戻るの？」

「僕のハッキングの腕、見誤ってるんじゃないかもしれませんか？」

眉を顰めて少年に機嫌の悪さを隠さない視線を向けられ、青年は苦笑して「いや、そんなことは……」と曖昧な返事を返す。

「ほら、後三十秒ですよ」星の怪盗さん

「嫌味たらしーな。……つか、俺はその名前氣に入つてないんだって」

「はいはー。分かりましたから」

軽く受け流してパソコンのディスプレイを閉じていく少年の栗色の後頭部を、青年は微笑まい心情で、眺めていた。こうこうこうは、やはり青年に比べて子どもなのである。

パソコンと言つても、正方形の板のようなもの。少年は小さなソレを器用に折りたたみ、そつとそのグレーのパートの中に忍ばせた。それを確認した青年が、細く微笑む。

「さあ。始めようか」

演技染みた動作で、オペラの役者のように言つて見せた青年は、軽やかに屋上の柵の上へと舞い降りた。パチチンと一つ右手を打ち鳴らせば、あらかじめ仕込んでおいたライトが光る。

少年も慣れた様子でその隣に並ぶ。近くに立つて始めて、青年の方が頭一つ分ほど背が高いのが見て取れた。

青年は、歌うように告げる。

美術館の前に並んだ警備員たちの視線と、集まつてくる観衆に微笑んで。

まるで、魅せ付けるかのよう。

「今宵も、宴の始まりだ」

蒼いビロードのマントと濡れ鳥のよつた漆黒の髪。

「……了解」

若草色のスカーフにアクアマリンの眸。

「皆さん！ 怪盗プラネットスが、聖なる月夜をお届けします！」

それぞれが、一気に停電した夜の街と、午後十時を知らせる幻想

的な時計塔の鐘の音の元へと溶けて行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6096i/>

星の怪盗 -怪盗は星の海に沈む-

2010年10月9日05時47分発行